

海外文書館案内 18

北京市房山区档案館

筆者は、1994年8月、敦煌遺書古文書学国際シンポジウムの全史料協からの参加メンバーの一員として、中国を訪れた。そこで初めて外国の文書館を見学する機会に恵まれたので、その時に感じたことを述べたい。

北京市は、18の区・県に別れている。房山区はそのうちのひとつで、北京市中心部からバスで2時間ほど郊外にいったところにある。人口は約78万人、面積は2,019km²。農業を中心産業とする地域で、行政体の規模としては、日本の市町村と同レベルである。

房山区档案館は、銃を持った2名の警備員に守られた区の共産党委員会の一角にあった。職員の構成は、館長以下、副館長2名、その下に保管課(7名)、指導課(4名)、管理部門(3名)となっている。このうち指導課は、各部署のファイリング等の指導および档案の複製を担当しているとのことであった。

档案館の建物の中には、党史編纂事務局も入っているが、組織は別である。

房山区档案館は、区内180か所の役所、公共団体の文書を収集している。公文書の引継は完結後9年たった時点で、評価・選別して行っている。長期保存文書と永年保存文書がその対象である。

館の収蔵点数は約3万400点で、年間の利用人員は約300人、利用点数は約1900点(1985年

～1990年までの6年間平均)である。利用の形態は、行政利用が80%、個人利用が20%で、個人利用の内訳は主として次の2点である。

- 1 個人の履歴調査、証明書の発行。
- 2 土地の境界に関する証明。

「庫房」と呼ばれる書庫は、窓のあるごく普通の部屋である。厚手のカーテンを使って遮光をされており、空調設備はない。訪問時はひどく暑い日で、窓を開け、外気をいれて温度調整をしていた。「温度は・・・?」「埃は・・・?」とこちらが内心でいろいろ考えている一方で、案内して下さった館長はたいへんおおらかにかまえていたのが印象的だった。

見学させていただいた書庫は2か所で、最初の庫房7には、区がもらったトロフィー、記念品、賞状などを保管しており、次の庫房9には公文書が保存されていた。

書庫内は日本でよく見る書架の形ではなく、緑色の金属製で、扉のついた保存箱が3段づつ重ねられていた。それぞれに持ち手がついていて、非常時には容易に持ち出せる格好になっているとの説明に、これはこれで便利なものだった。

閲覧室は30名ほどが入れる小部屋で、天井で扇風機がまわっており、壁には利用上の注意事項(内容が読めなかったのが残念だった)が掲示されていた。提供されている目録はカード形式で、組織別分類がなされているとのことであった。

短時間で見た限りでは、業務や設備について、そう大きな違いがあるとは思えない。ただし、あの銃をもった警備員の間を1人で通って閲覧しに行くのは、あまり気分のよいものではないだろうというのが、「外国人」の勝手な感想である。

(吉田 千絵 北海道立文書館)

